

桜蔭俳話会 十二月句会(第三〇一回)秀句鑑賞

寒風や骨董市の斧と鎌

友子

【秀句鑑賞】

「寒風や」と上五に置いているから、この骨董市は戸外で開かれているのであろう。また、下五に「斧と鎌」とあるから、この骨董市は好事家の鑑賞対象となる由緒謂れのある骨董品だけでなく、世田谷のぼろ市に代表されるような民具や生活雑貨も数多く出展されている骨董市なのであろう。

そこで、作者は斧と鎌を発見したのである。斧と鎌の握り柄は、使い込まれた年月を示すように黒光りしているが、それらの刃はこれからも十分実用に耐え得ることを訴えるように冬の日に鋭い光りを返している。寒風とあることによって、それらの斧や鎌が野外の農作業で実用に供されて来た、生きた民具であることを実感させられる。

落葉踏む音ゆるやかに老女の背

田鶴子

【秀句鑑賞】

前を行く人が厚く積もった落葉の絨毯を愛おしいかのようにゆっくり踏み歩いている。落葉の踏み音はその人の後を進む作者にもゆるやかに伝わる。落ち葉道を歩くときの感触が過不足なく表現されている。

下五の「老女の背」は確かに実景なのであろうから、これはこれで良いかも知れないが、性別を言わない方が良いと思う。「背の丸し」、「背の老いし」とすることもできる。

いずれにしても、老人が今まで歩んで来た人生を思い返しながらか、落葉を踏みしめていく情景が感じ取れる。

一人また一人浜辺の大焚火

守

【自句自解】

歳時記には「焚火」が季語として採録されており、現に多くの人によって焚火の句が詠まれているが、実際のところ、都会では防火対策から焚火は条例によって実質的に禁止されており、田舎でも人家の込み合っている地域では、煤煙が舞い込むことから、町内会の申し合わせによって自粛対象になっている。落葉掻きのポリ袋が清掃車に回収される時代である。広い田畑の真ん中か海岸が焚火に残された空間である。

暮れなずむ浜辺で行なわれている大焚火の廻りには、立ち上る明かりを目指して、海岸を散策していた人が「一人また一人」と懐かし気に立ち寄ってきた。今年、その浜辺や海で亡くなった人々の魂も大焚火に吸い寄せられて来るような感じがした。

柿二つ包んで祖母の帰り来る

秀一

柿の木は梅の木と同様に果実の収穫目的もあって庭木としてよく植えられる樹種である。近所の知人宅に出掛けていた祖母が前掛けやエプロンに包んで、あるいは手近の紙片などに包めて、柿の実をお土産に帰ってきた。これだけの情景であるが、人々の暮らしの身近にある柿の木の存在を如実に物語っている。また、「柿二つ」と個数を特定したのも臨場感がある。ご近所の庭先から頂いて帰るには、この位の数が適当である。

諍ひの一言多き冬満月

幸

【秀句鑑賞】

夫婦あるいは恋人の間でも、諍いの原因はえてして些細な事柄である。でも、原因はともかくとして、一旦始まってしまった冷戦状態を自分から終わらせるのは、容易ではない。その一言を取り消して率直に謝れば済むことであるが、これがなかなか出来ないのである。

諍いの原因を作った作者の後悔を知ってか知らずか、冬満月は煌々として天空にある。あるいは、作者は冬満月に背中を押されて、作者は和解の言葉を相手に告げたのであろうか。

銀杏散るまつただ中の幼き子

ヤエ子

【秀句鑑賞】

銀杏の落葉の様子の見事さはまさに圧巻である。銀杏の木が数本かたまっているところや銀杏並木であれば尚更である。大人でもこうであるから、幼き子であれば一層感動することであろう。幼き子は、その感動を素直に表現するかのように、銀杏の散る真っ只中に、銀杏落葉を招くように両手を挙げて立っている。あるいは、手など挙げずに、銀杏落葉のシャワーを頭から浴びているのかも知れない。いずれにしても、中七の「まつただ中の」が効いている。

ぼったりと会ひて破顔の年の暮

真三

【秀句鑑賞】

街角や駅頭、あるいは訪れたビルのエレベータロなどで、知人にぼったりと出会ったときの驚きは、「破顔」で表すのが一番である。気ばかりが急ぐ年の暮れの出来事であれば、尚更である。「破顔」の後に「やあ」の一言が続き、次に控えている用件を気にしながら、立ち話が始まったのかも知れない。

文責 副代表 増田 守